

ラマンチャの一都市

— シウダ・レアル —

栗原 福也

近世初頭、スペイン帝国がその繁栄をほしいままにしていたとき、カスティーリャに栄えた諸都市としてバリャドリッド、アビラ、マドリッド、トレード、アルカラー・デ・エナーレス、プラセンシア、トルヒーリョ、コルドバ、セビーリャなどとともにシウダ・レアルがある。シウダ・レアルはイベリア半島の中央部を占める新カスティーリャの南部、ラマンチャの高原に位置し、現在、人口約4万、首都マドリッドの南方200キロメートルのところにある。筆者はかねてからシウダ・レアルすなわち「国王の都市」という特異な名前に関心をもっていたが、最近カルラ・ラーン・フィリップス女史の「シウダ・レアル(1500～1750年)——スペイン経済の成長、危機、再調整」を読む機会をえたので、以下に本書の内容について紹介し、若干のコメントを付け加えたい。⁽¹⁾

本書はニューヨーク大学のN. サンチェス・アルボルノス教授指導のもとに書かれた博士論文で、著者は現在ミネソタ大学歴史学準教授である。本書の意図は第1章の「自然的・歴史的背景」の冒頭に述べられている。すなわち「16世紀後半、極盛に達したスペインは太陽の沈むことなき一大帝国を支配し、ヨーロッパの政治に強い影響力を及ぼした。1600年ごろ、思慮あるスペイン人は恐るべき不吉の事態が生じているのに気づいた。1650年ともなれば、ほかの国の人びともそのことを知っていた。つまり、オランダ、フランス、イギリスの諸国が興隆し、スペインはヨーロッパ政治における二流国におち

ぶれたのである。多くの歴史家はこの進行過程、ことにカスティーリャの経済的基礎（アメリカの貴金属も含めて）とスペイン王国が果たした政治的役割のあいだの継続的な相互作用を無視してきた。私はカスティーリャの一都市シウダ・レアルにおいて、この都市が経済成長を開始した1500年ごろから、自給自足経済の典型的な見本になった1750年までの期間にわたって、このような相互作用を検証したい。これらの期間に、シウダ・レアルの住民は国際経済の変転とカスティーリャの経済的基礎内部の変化に自己を適応させたのであった。」

かくして著者は、ラマンチャの一都市にスポットを当てることにより、スペイン帝国没落という壮大なドラマを照らし出そうとする。章別構成はシウダ・レアルの成立、発展とその地理的・自然的背景から始めて、人口——構造とトレンド（2章）、農業経済（3章）、工業・商業・貿易（4章）、17世紀における土地所有パターンの変化（5章）、国王の課税（6章）、都市のエリート（7章）、結論（8章）および附録から成る。

シウダ・レアルの歴史は13世紀にさかのぼる。1212年、カスティーリャ、アラゴン、ナバラのキリスト教国連合軍はラス・ナーバス・デ・トロサの戦いにおいてイスラム教徒の軍隊に大勝利をえ、以後、カスティーリャはその軍事的優勢のもとに、1世紀にわたって、イスラム・スペインに対する攻勢と征服の時代を迎えた。コルドバ(1236年)、セビーリャ(1248年)、

カディス（1250年）は征服され、アルモアアデ帝国は崩壊し、イスラム勢力はグラナダ王国を残すだけになった。カスティーリャ王国はイスラム教徒から奪回した地域に修道会と軍隊の性格を兼備する騎士道会（カラトラバ、サンティアゴ、アルカントラ修道会）を創立しイスラム・スペインに対する防衛とした。征服戦に功績を挙げた貴族はこれらの修道会に所属して新カスティーリャ、エストレマドゥーラの南部高原地帯、さらにアンダルシアの広大な土地を与えられた。こうしてカスティーリャ王国の南部地域には、勤勉なイスラム教徒農民（モリスコ）が追放されたあとに、北部出身の聖俗貴族による大土地所有制が成立し、近代を通じて、これらの貴族に抵抗するブルジョワジーの形成がみられなかったスペイン社会において、かれらはこの国の支配層としての地位を維持した。大土地所有制と並んで南部高原地帯に移動牧畜制度が導入され、以後、かの有名な移動牧畜業者の組織「メスタ」によって、中部高原地域からラマンチャを通過して南はアンダルシアの平原まで、カスティーリャ王国を縦断する牧羊群の季節的移動が開始された。

修道会にひとたび与えられた土地は国王の手に戻ることはなく、強大化した貴族の勢力は国王にとって危険な存在となった。13世紀半ば、ことにイベリア半島におけるキリスト教徒の勝利が決定的になると、封建貴族は国王に対抗して政治的・経済的要求をつきつけるようになった。カラトラバ修道院は1147年カスティーリャ国王アルフォンソ7世が征服したグアディアナ河畔のイスラム城塞カラトラバに因んで12世紀中葉創設され、イスラム征服とともに次第に広大な土地を与えられて、ラマンチャ高原に強大な勢力を張るに至った。1255年、アルフォンソ10世賢王（1252—84年）はカラトラバ修道院を牽制するためこの修道院領の真ただ中に「国王の町」villa real を建設し特許状car-

ta puebla を与えた。すなわちこの新しい町はすでに後退したイスラムに対してでなく、一大軍事勢力である修道院に対する国王の最前線基地として創設されたのである。言い伝えによると、ビリャ・レアルは国王みずからの設計による130個の塔と6乃至8個の市門を備える市壁に囲まれ、中央広場から延びる6本の放射線状道路が通じていた。町へ定住者をひきつけるために、移住する貴族にはトレードの慣習法が適用されて税金免除その他の特権が与えられ、平民には当時自治都市のモデルと考えられていたクエンカの慣習法が適用された。さらに定住者はすべて土地を与えられ、セビーリャ、トレード、ムルシアを除く全国王領で通過税・輸出入関税を免除され、町は数個の周辺村落とその所有地に対する裁判権を与えられた。以前附近に住んでいた改宗ユダヤ人、モリスコが多数移住したことが注目される。

国王の町に対し、カラトラバ修道院はこの町に所属する領土（1751年ごろ約19500ヘクタール）の周辺に城塞を持つ4つの町を築いて対抗し、両者の争いは絶えないが、14世紀の前半、グラナダ王国に拠るイスラム教徒の反抗もあって、国王はカラトラバ修道院と妥協せざるをえなかった。

1421年、カスティーリャ国王ファン2世がアラゴンの王子エンリーケに攻撃されたとき、ビリャ・レアルの市民軍が救援にかけつけたことによって、この町は「国王の都市」シウダ・レアルの名称を許された。1476年、エンリーケ4世の死後、国王の娘フアーナと異母妹イサベルが王位継承を争ったとき、シウダ・レアルはイサベルおよびその支持者アラゴンのフェルナンドの側に味方した。フアーナを支持するカラトラバ修道院の軍隊に攻撃占領されたシウダ・レアルはイサベルとフェルナンドの派遣した救援軍によって、激しい市街戦の末に解放された。この戦争以後、カトリック両王の行

政上の支配はカラトラバ修道院領内に及び、また両王はカスティーリャの主要都市に市警察（サンタ・エルマンガード）を設置したが、シウダ・レアルの警察軍はことに強力だった。このような状況の中でこの時期シウダ・レアルは国王への忠誠と新カスティーリャの要衝として王国におけるもっとも重要な行政中心地の1つになり、1483年にはこの市に異端審問所が設けられ、94年、大審院が置かれた。しかしながら、85年、審問所はトレドに、1505年、大審院はグラナダに移った。

カトリック両王の共同統治さらにハプスブルク家の支配によって、カスティーリャ王国は否応なく、地中海、ヨーロッパはもとより大西洋を越え新大陸にまたがる広大な世界とかかわることになった。かくして王国内の諸都市バリャドリッド、セゴビア、ブリゴス、シウダ・レアルに代ってナポリ、ミラノ、アントウェルペン、ベラクルス、メキシコ、ポトシなどの大都市がやがてスペイン王国の主要都市として脚光を浴びることになり、新大陸植民地の開発が進むに従って王国の重心は西南海岸地域に移動し、カスティーリャ地域の諸都市はその生産物が周辺の地方市場の需要を満たすだけにとどまらず、世界市場と結びつきえた場合にのみ繁栄を維持することができた。

シウダ・レアルの場合はどうだったろうか。シウダ・レアルの住民が所有し、この都市の行政区域に属する土地は必ずしも広くなく、雨量も少なく痩せた土壌は耕地よりも牧草地に適していたうえに、この都市を囲む広大なカラトラバ修道院領内での土地所有や農業経営は許されなかったため、農業は都市の全住民を養うことができなかった。しかし、この資源と土地の不足が逆説的にこの都市の潜在的な経済的可能性を発現させる原因となった。すなわち、土地の不足する多くの農民は手工業に従事し、その生産物はかなり広範囲の市場を見出すように

なったからである。マドリッドとアンダルシーアを結ぶ位置にあったことも、この市の農業と商工業を発達させる要因となった。

16世紀前半のスペイン王国ことにカスティーリャの多くの地域は、人口増加と植民地への輸出増加、皇帝カール5世（カルロス1世）の絶えざる戦争政策による軍需品、食糧供給の必要などによって、生産力拡張への刺戟と経済成長を経験した。アメリカからの貴金属の流入はハプスブルク帝国の戦争維持策に投入されたが、イベリア半島の経済活動をもある程度は活発化した。人口増大は穀物・ぶどうなどの農産物価格を押しあげ、農村に利益をもたらし、1570年ごろまで若干の耕地面積拡大を生じた。人口増大はまた工業製品への需要を盛んにし、トレドの刀剣、コルドバの革製品、オカーニャ、シウダ・レアルの皮手袋、セゴビアの毛織物、グラナダの絹織物などを発展させた。これらの製品は高級な贅沢品であり、高価な輸送費用の負担に耐える国際商品として輸出された。同時にフランス、イギリス、オランダからの国内・植民地向け貿易も増加した。しかしながら、うち続く戦争のために、アメリカから運ばれる膨大な貴金属を食いつぶしてなお破綻に瀕した国家財政はメスタからの多額の上納金、羊毛輸出税に依存し、王室はメスタに対して手厚い庇護を与えたので、農業より優位を占める牧畜業によって農業の一層の発展は阻止された。工業においても、国王は上納金（セルビシオ）を課し、また治安を確保するためにギルドを保護強化した結果、ギルド規制の重圧は工業の発展を阻止した。羊毛輸出の保護もまた国内毛織物業の発展を妨げた。

16世紀最後の4半世紀に至って、カスティーリャ王国の人口と農工業は危機を迎えた。政治的にスペインはネーデルラントの反乱になんら有効な手を打てず、多大の戦費を注ぎこんで南ネーデルラントを確保したとはいえ、そのあい

だに経済の重心はオランダ、イギリス、フランスに移り、スペインは原料とアメリカ銀を国外へ流出させて、これら諸国から食料、工業製品を輸入するようになった。危機に陥ったカスティーリャ経済にとって、減税と工業の保護が必要だったにもかかわらず、絶えざる戦争による国庫の窮乏化は増税につぐ増税を招いた。

17世紀の前半、しばしば起こった凶作、疫病、さらに、モーロ人の追放、国外への出兵と植民地移住者などの人口流出はカスティーリャの人口を750万から600万に減少させた。人口圧は消滅し、限界耕地はふたたび牧草地になったが、物価を鎮静させるところか、逆に、国外の戦争と国内の反乱を鎮圧するための増税金とペリヨン貨の発行はインフレーションを激化させた。増税は物価上昇率を上廻り、おまけにほとんどあらゆる生活必需品に課せられる逆累進的なアルカバラ（取引税）が民衆の生活に重くのしかかった。17世紀末に至って初めて税金はやや下降し、カスティーリャ経済の回復とカタロニアにおけるかなりの経済成長がみられ、さらに18世紀、ブルボン王朝の時代に緩やかな発展が続いたが、すでにスペインはヨーロッパの二流国へと転落していた。

1500年から1750年に至るシウダ・レアルの人口と経済の推移は上に述べたようなスペインの人口、経済の一般の変動にはほぼ対応している。16世紀初期のシウダ・レアルの正確な人口は不明であって、現代の歴史家達はいくつかの現存シウダ租税台帳をもとに、1200戸から2500戸、人口数にして1万人内外と推定している。著者はシウダ・レアルの3つの教区のうち、サン・ペドロとヌストラ・セニョーラ・デル・プラードの2教区の教会記録をもとに毎年の洗礼、結婚、死亡者の数を調査し（附録A）、出生、結婚、死亡の年々の季節的変動および長期的な時系列的変動を明らかにした。そもそも15世紀末、当市に改宗ユダヤ人の取締りを目的

とした異端審問所が置かれると、市の繁栄に貢献していたユダヤ人地区は衰微し、加えて異端審問所と上級裁判所が他所へ去ると、16世紀初頭のシウダ・レアルは平凡な一地方都市に転落した。しかし、あたかもこの時期から人口は上向きに転じ、上昇は1570年ごろまで続き、さらに70年にはグラナダから3000人のモーロ人がこの市に移住してきた。

シウダ・レアルの経済的基礎は農業であった。地主である聖俗貴族とともに、全戸数の半ばは農家であり、そのうち25～30パーセントは少くとも農地と役畜を所有する自営農であり、残りは農業労働者の家庭であった。フェルナン・ブローデルが強調したように、地中海農業の統一性は小麦、ぶどう、オリーブの栽培と移動牧畜にみられるが、シウダ・レアルの農業もまさにこのような地中海農業の特性によって規定されていた。小麦は肥沃な耕地に栽培され、シウダ・レアル周辺のラマンチャ地方は新カスティーリャのうち小麦の生産地だった。ラマンチャはまたボルドーやボージョレと並んで、辛口の赤ワインの産地として知られ、地方的需要を満たすとともに、すでに16世紀には輸出されるようになった。ぶどうとオリーブ生産が換金作物として有利であった。穀物輸入のための交通路が不備のため、穀物不足のとき、外部からの穀物の安定的供給が難しかったので、シウダ・レアルにおいては小麦の生産が優先されたが、1570年までの人口増加に伴う穀物需要上昇とワインの輸出は農業の好況を呼び、農業・土地投資を盛んにした。

1570年以降、シウダ・レアルは人口の停滞に加えて、しばしば凶作に見舞われた。レパントの海戦、アルマダ艦隊の建設、英蘭との戦い、ユグノー戦への干渉などで国費を濫費し、頼みとする新大陸からの銀の流入は不安定で予測も外れることが多かったため、フェリーペ2世はたびたび増税をし、食糧品、必需品に課せられ

るアルカバラは3倍に引き上げられた。70年以降、人口減少と課税引上げは農業の衰微を招き、1600年ごろになると、工業もまた購買力の極度の低下によって後退し始めた。

1604～5年、シウダ・レアル地方はひどい凶作に襲われ、1610年にはカスティージャからのモーロ人追放で、当市からも2～3000人のモーロ人が去り、市は一挙に4分の1ないし3分の1の人口を失った。1621～5年に市の経済は最悪に達し、農・工・商はともに激しい衰微に見舞われ、市の財政収入も激減した。以後、市の人口は徐々に増加し始め、17世紀中葉、不況とペストによってほぼ世紀初頭の水準に低落したのち、1670年ごろからふたたびゆるやかな上昇に転じた。

1749年、フェルナンド6世の命により大蔵省は税制改革を目的として、スペイン経済の実態調査を実施し、シウダ・レアルの回答は51年に提出された。Catastro de Ensenada と呼ばれる各都市の回答 (Respuestas) (国立シマンカ古文書館) は18世紀中葉のスペイン各都市の経済状況を知る絶好の史料であるが、著者もまたこの史料を利用し、1751年におけるシウダ・レアルの非貴族住民の諸職業と各職業従事者数を附録Bとして採録している。1751年の調査によれば、市の人口数は16世紀末の水準にまで復し、シウダ・レアルはふたたび地方商業の中心として繁栄を回復し、ことに建築関係の労働者が多数であることから、当時の建築ブームが推定される。いずれにせよ51年の職業状態からわれわれの心に浮かぶイメージは農工商においてある程度のバランスのとれた平凡な都市、つまり経済的には狭い地方市場向け生産を基盤とする自給自足的な、地方都市のそれである。シウダ・レアルは17世紀の経済的衰退から復興するために、国際貿易に依存することができなかった。上質の国産羊毛はメスタによって輸出され、高価な上質羊毛の使用できない国内の生

産者は粗製毛織物の製造に甘んじた。内陸地方シウダ・レアルの農産物や粗製織物は高い輸送費のために遠方の市場を見出すことは不可能だった。のみならず、いまや外国の低廉な製造品がスペイン市場に流入し、市の農工生産物の市場は収縮するばかりだった。

市の最富裕層は地主的貴族層だった。彼らはまた多数の牧羊群所有者であり、メスタに参加して羊群の移動牧畜を行い、羊毛輸出を通じて国際貿易に参加しているばかりでなく地方的商業をも (たとえば荷車の所有などによって) 支配していたことは注目に値する。

1505年に定められた長子相続制度によって土地の売却、譲渡は禁じられたので、土地はいよいよ貴族の手に集中した。16世紀の農業の好況は土地投機熱を生んだが、17世紀に進行したインフレ、通貨の混乱は安定した土地財産所有熱と土地投機を喚起した。富裕な牧羊業者その他の貴族層は企業リスクの回避と投資の安定を目差して争って土地を購入し不在地主化した。彼らはまず短期抵当貸付 (コンソ・アル・キタール) によって農民、土地所有者に融資した。この貸付は国債と並ぶ貴族 (地主)、富裕な商工業者の投資対象となりその債権は自由に流通し利率は17世紀中葉50パーセントに及んだといわれる。

(1) Carla Rahn Phillips ; Ciuda Real 1500-1750. Growth, Crisis and Readjustment in the Spanish Economy. Harvard University, 1979.

* 本稿は昭和53・54年度科学研究費補助金 (総合研究A, 研究代表者 竹内啓一, 課題「地中海地域における集落の形成と発達に関する比較研究」) による研究成果の一部である。